

Ⅶ 大坂城跡府庁地点出土の瀬戸・美濃産陶磁器について

藤澤良祐・金子健一（財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター）

我々は、『瀬戸市史』編纂に伴う近世瀬戸焼の流通調査の一環として、財団法人 大阪府文化財調査研究センターのご厚意により、大坂城跡府庁地点における13の近世遺構（層）出土の土器・陶磁器の接合後の破片数をカウントする機会を得た。その成果の一部は『大坂城跡の発掘調査』6や『瀬戸市史陶磁史篇六』で既に公表されているが、本報告の刊行にあたって今一度まとめておきたい。

1. 陶磁器の産地別組成

13遺構のうち、総破片数が100点以上確認されている8つの遺構を中心に、府庁地点における近世陶磁器の時期別・産地別の搬入状況を概観しておく。これら8遺構は、瀬戸・美濃産陶磁器の編年観により次の4つのグループに分類することができる。

まず、第1グループとして1 B土坑1の遺物群が挙げられる。瀬戸・美濃産は登窯第5・6小期（17世紀末～18世紀前葉）を主体とし、第7小期（18世紀中葉）のものが僅かに認められる。第1グループでは陶器製品と磁器製品の破片数がほぼ拮抗する。磁器はすべて肥前産で、陶器も肥前産が主体を占めるなか、京・信楽窯をはじめとする関西産陶器も一定量みられるが、瀬戸・美濃産は極めて少ない。

続く第2グループとしては、5 B土坑101と5 A土坑210の遺物群がある。瀬戸・美濃産は第7小期と第8小期（18世紀後葉）が主体で、第5・6小期のものが若干含まれる。第2グループでは磁器製品の占有率が陶器製品を上回っている。磁器では前段階と同様ほぼ100%肥前産であるが、陶器では肥前産が激減し、それに代わって瀬戸・美濃産や関西産陶器が高比率を占めるようになる。

第3グループには、5 A土坑31と5 A土坑184があり、5 B土坑114の遺物群もこのグループに含められよう。瀬戸・美濃産は第8小期と第9小期（19世紀第1四半期）が主体で、第7小期のものも少なからず含まれる。このうち5 A土坑31のデータは、瀬戸・美濃産以外の産地別の分類が不十分であるが、5 A土坑184をみる限り、陶器製品と磁器製品の産地別構成比は、前段階とほとんど変わらないようである。なお、5 A土坑184では、僅かではあるが瀬戸・美濃産の磁器が出土している。

第4グループには、1 B土坑2・1 B土坑3・5 A 3層があり、その他にも5 B区の土坑1・土坑13・土坑119などが挙げられる。瀬戸・美濃産は第8小期以降を主体とし、第11小期（19世紀中葉）のものまでが認められる。このグループでは陶器製品と磁器製品の占有率が逆転し、陶器が磁器を上回っている。陶器では瀬戸・美濃産が減少し、在地窯と考えられる関西産陶器が圧倒的多数を占める。磁器では肥前産が後退し、瀬戸・美濃産や関西諸窯と思われるものが一定量出土するようになる。

2. 瀬戸・美濃産陶磁器の搬入状況

続いて、府庁地点出土の瀬戸・美濃産陶磁器の時期別の搬入状況について、これまで製作技法や胎土の類似性から「瀬戸・美濃」として一括されてきた両者を分離することにより、少し詳しくみていきたい。実見した13遺構の瀬戸・美濃産陶磁器の総数は218点である。このうち、大窯期後半（16世紀末）の折縁皿と第3小期（17世紀中葉）の天目茶碗が各1点確認されたが、これらはおそらく混入であろう。

第2段階（第5～7小期）の瀬戸・美濃産陶器製品は47点、第5・6小期のものは8点と少なく、瀬

表4-VII-1 遺構別土器・陶磁器組成表

産地	土 器																				瀬 戸																					
	土 器					施釉土器					瓦 器					人形					焼塩壺					瀬 戸																
器 種	火鉢	小皿	灯火鉢	植木鉢	蓋	煮炊具	その他	不明	小計	灯火鉢	碗	小皿	蓋	その他	不明	小計	火鉢	その他	不明	小計	人形	小計	身	蓋	小計	計	茶碗	天目	小皿	湯呑	碗蓋	供膳鉢	調理鉢	植木鉢	水甕	その他	小計	計				
5 A 土坑184	2	37		2		28	5	2	76	90	20	3	2	1	4	2	122	7			7	50	50	4	3	7	262	7		1	1	2	3		3	5	1		1	3	24	3.36
5 A 土坑210	2	27		1		130	47		108	63			1	1	2	67	5	1		6	56	56	4	2	6	243	5									1	8		2	4	26	3.14
5 A 土坑31	12	32	14			30	3		91	67		22		6		95					43	43	10	20	30	259	14		3		2	2	1	3	3			2	1	31	4.22	
5 A 3層									23	5		1				6					17	17	2	2	4	50	1	1	1						1	1	3	8	1	17	7.83	
1 B 土坑 1									74	1						1							4	6	10	85	1													2	0.69	
1 B 土坑 2									35														1		1	36			2	2										4	2.34	
1 B 土坑 3									28														4	5	9	37	1		1									1	1	4	1.74	
5 B 土坑 1						1	2		3									3			3	1	1	1	1	8																
5 B 土坑13	2						7		9									2	1		3	5	5			17													1	2	2.6	
5 B 土坑101	4	2	1			3	3	2	15	3						3		1	1	7	7	7	2	2	28		1	1	3				1	1					7	6.67		
5 B 土坑112	1	6					1		8	1						1	1			1	1	1			11																	
5 B 土坑114										2	1					3		1	1	1	1		1	1	6	1												14	15	35.7		
5 B 土坑119	5			1			1	7									3	3		6	2	2		1	1	16												1	2	2	2.94	

産地	陶 器																																							
	丹波		備 前					肥 前										不 明																						
器 種	插鉢	小計	瓶	德利	壺	插鉢	窯道具	その他	不明	小計	碗	小皿	蓋物	瓶	德利	水注	神仏具	供膳鉢	壺	不明	小計	碗	天目	小鉢	德利	瓶	灯火鉢	水注	蓋	湯呑	蓋	壺	插鉢	煮炊具	その他	小計	計			
5 A 土坑184	3	3	1	2		2	3	1		9	6		1						10	3		20	2			1	5			1	7	1	1	1	1	19	19.7	24.5		
5 A 土坑210	4	4		1			1			4	6		1	1				5	1	1	15	1		1	1	2			2	1	1	2			2	14	188	24.6		
5 A 土坑31																																					61	103	8.3	
5 A 3層											4	2		1	1	1	1				10				3	1								1		7	12	93	42.9	
1 B 土坑 1				1						1	31	6		1				2	19	3	1	64																	98	34
1 B 土坑 2	1	1											1		1			3			5							1	1								3	93	54.4	
1 B 土坑 3	3	3	1	1			1			4	5	2			1			4			12														2	2	105	45.7		
5 B 土坑 1	2	2		2		1	1			4	11							3			14	1														1	22	47.8		
5 B 土坑13				1						1								1			3														1	2	23	29.9		
5 B 土坑101						1				1	2	1	1		1		5				9		1														4	36	34.3	
5 B 土坑112						1				1								9			11																4	27	56.2	
5 B 土坑114											2										22.9																	22	52.4	
5 B 土坑119							2			2		1									1																	27	49.7	

戸窯産は天目茶碗と丸碗、美濃窯産は丸碗・丸皿・鬘盥・洩瓶・汁次・有耳壺蓋がそれぞれ各1点みられる。第7小期のものは39点確認され引き続き美濃窯産が主体である。瀬戸窯産は10点で、うち瀬戸村産の香炉・水盤・片口・火入があり、赤津村産では銭甕がみられるが播鉢類は出土していない。美濃窯産は29点で、前時期の器種に加えて拳骨茶碗・小碗・輪花皿・摺絵皿・片口・折縁輪禿鉢・香炉などが認められるが、生産量の多い尾呂茶碗は全くみられず、江戸遺跡では搬入量の多い徳利類も非常に少ない。

第3段階（第8～11小期）の瀬戸・美濃産陶磁器は陶器製品が136点、磁器製品が33点、計169点が確認されている。陶器では、第8・9小期に位置付けられる131点のうち117点が瀬戸窯産で前段階より急増するが、美濃窯産は僅か14点と減少している。瀬戸窯産には、刷毛目茶碗・奈良茶碗・丸碗などの茶碗類をはじめ、腰錆・せんじ・小中などの湯呑類、梅文皿・染付皿・輪花皿などの小皿類、練鉢・片口などの調理具の鉢類、馬の目皿・水盤等の盤類、水甕をはじめ植木鉢・火鉢・瓶掛・手水鉢などの住用具も一定量出土しており、当時瀬戸村で生産された大半の器種が確認できる。一方、美濃窯産は鎧茶碗・丸碗・鎧湯呑・小碗・灯明皿・有耳壺・徳利・蓋物・洩瓶などの器種が各少量みられるにすぎない。なお、確実に第10小期（19世紀第2四半期）以降とされる陶器製品は、時期が確定できない2点を除くと瀬戸窯産の染付皿と水甕が計3点確認されるに留まり激減する。

磁器のうち、時期が確定できるものは第9小期は3点にすぎないが、第10小期が13点、第11小期が15

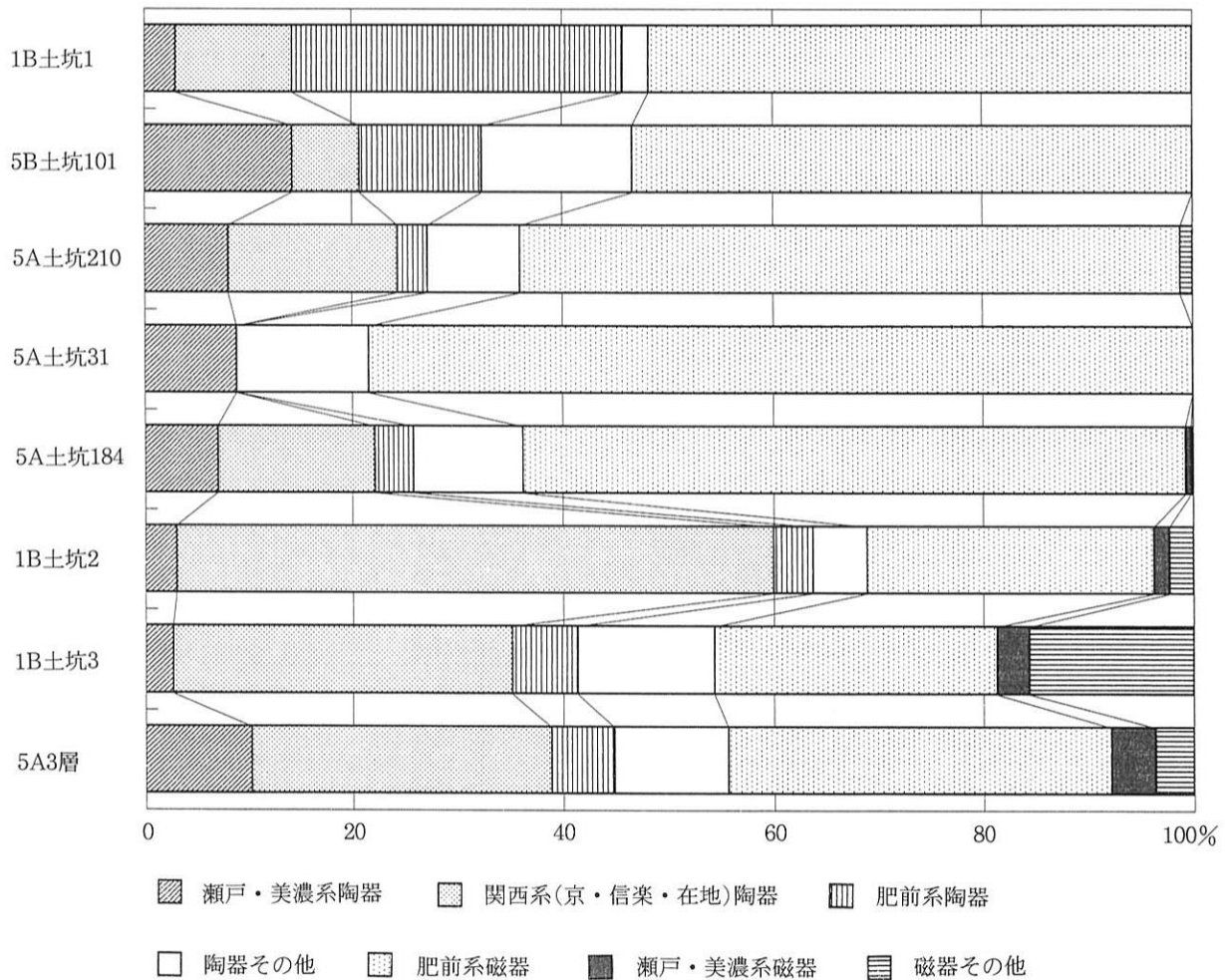


図4-VII-1 陶磁器の産地別組成

点と第10小期以降急増する傾向が窺われる。器種は端反碗形の茶碗や湯呑を主体とし、筒形湯呑・型打皿・蓋物などが少量出土している。磁器製品における「瀬戸」と「美濃」との明確な分離方法は未定立であるが、生産状況からみて第9・10小期は瀬戸窯産、第11小期は美濃窯産が主体を占めるものと思われる。

以上のことから、大坂城跡府庁地点における瀬戸・美濃産陶器は、肥前産陶磁器全盛の中で第5小期以降、量は少ないながらも美濃窯産を主体に確実に搬入されており、その後徐々に増加する傾向がある。そして、第8小期には美濃窯産は減少するものの、全国的な陶磁器需要の拡大に伴い瀬戸窯産が急増し第9小期にかけてピークに達する。しかし、第10小期以降は在地の関西産陶器に圧迫される形で激減している。それに対して瀬戸・美濃産磁器は、当時瀬戸村で開発されたばかりの第9小期のものは少ないが、第10小期以降に急増し、第11小期には生産が本格化した美濃窯産が中心になっていくようである。

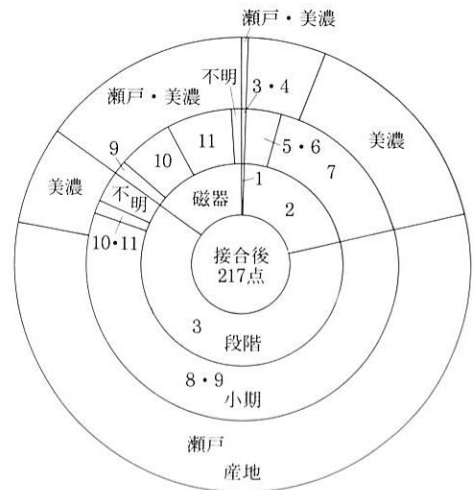


図4-VII-2
大坂城跡の瀬戸・美濃焼時期別搬入状況

写真図版4-VII-1



5 A 調査区土坑31出土美濃窯製品



5 A 調査区土坑31出土瀬戸窯製品



5 A 調査区建物1 (3層) 出土瀬戸・美濃窯製品



5 B 調査区土坑101出土瀬戸・美濃窯製品



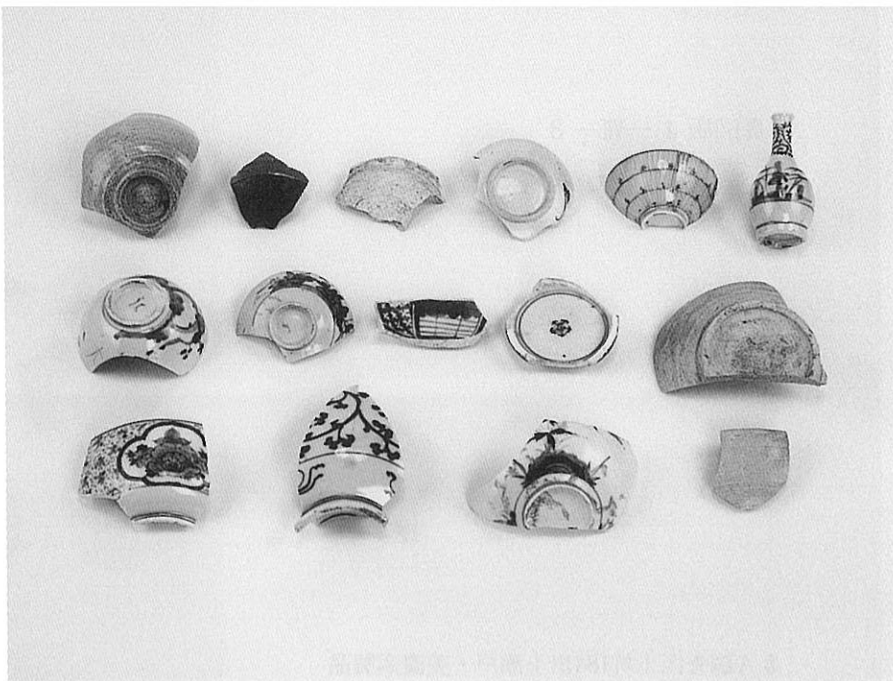
5 A 調査区土坑184出土瀬戸・美濃窯製品



5 A 調査区土坑210出土瀬戸・美濃窯製品

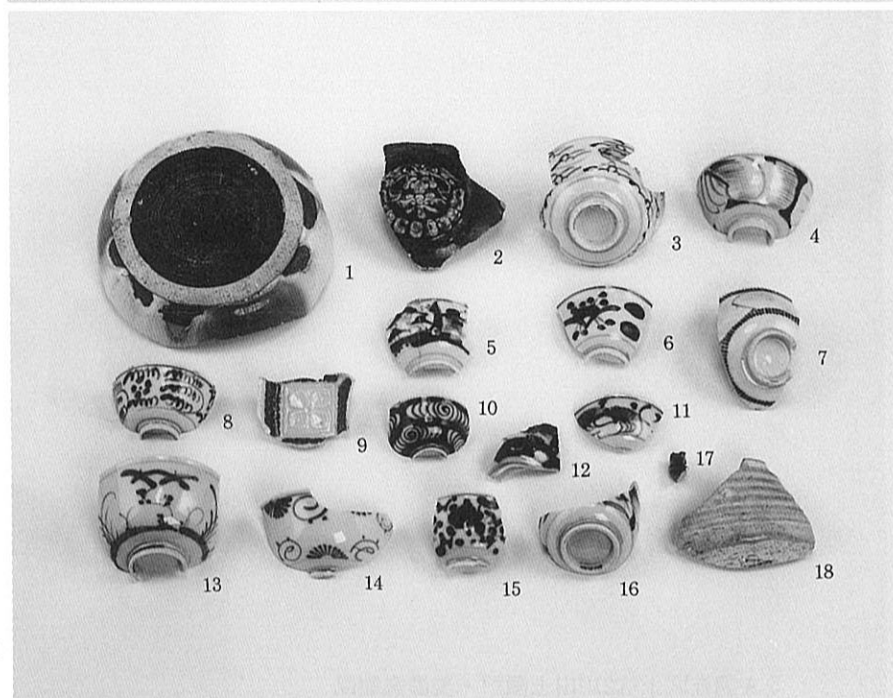


同 上



5 A 調査区 4・5 層出土瀬戸・美濃窯製品 (上)

5 A 調査区 2 層出土瀬戸・美濃窯製品 (中・下)



5 B 調査区土坑13 (1~11)、土坑1 (12)、土坑

119 (13~18) 出土瀬戸・美濃窯製品



5 B 調査区土坑114 (1~3)、土坑112 (4)、
1 B 調査区土坑1 (5~10) 出土瀬戸・美濃窯製品



5 A 調査区土坑184出土瀬戸・美濃窯製品



1 B 調査区土坑 3 出土瀬戸・美濃窯製品



1 B 調査区土坑 2 出土瀬戸・美濃窯製品

